



ゆかりのGOAL前編、中編までのあらすじ

道端に 立ってたドアを通ったら、
別世界の中 さまようことに。

女子大生ゆかりは
替え玉結婚に利用されそうな瀬戸際にいた。

本来の 縁談とりもつ作戦も
逃げたと見なされ 追っ手を出される。

一方で、階層世界研究所、化け猫退治に取り組んでいた。

わけあって、ゆかりだけしか勝ち目無し。
連れてこようと彼女を追ってた。

あちらから、こちらからも、と追われる身

ゆかりを どんなGOALが待ってる？

ごきげんでプリウスに乗る克哉見て、
ついてくゆかりは首ひねってた。

「克哉さん、助けてくれるというよりも、
おもしろがってるだけだったりして？」

助手席にゆかりが乗ったの見届けて、
克哉がプリウス発進させた。

標的に密かに迫る追跡者。当のゆかりは知る由も無し。

「ビジターを連れてきます。」
と、K・S・K屈強トリオ行動開始。
とりあえず、
車でヤナデン目指しつつ、逐一、指示をケータイで聞く。

オペレーター、地図の画像を睨みつけ、
「ヤナデンを出て、東へ移動・・・。」

「ねえ先輩、花子さんって、メスでしょう？

子猫もいたら大変なんじゃ・・・？」

聞いてきた真央に麗香の回答は

「子猫の記述は、どこにもないの。

・・・『ビジターの命の矛盾』と呼んでるわ。

死なない代わりに、産めないみたい。」

「もし勝てば、

今度は今のこの人が、

子供もできないゾンビになるの？」

「・・・多分、そう。

『時空の亀裂』のことはまだ

ほとんど何もわかってないもの・・・。」

帰につく希望は無い

とはまだ知らず、ゆかりは夢中でケータイいじる。

「達人か・・・？」

指の速さに感動し、克哉はゆかりに設定任せた。

そういえば・・・。

今さらだけど、千恵さんに・・・。

半日遅れの非常報告。

「ゆかり様！？今まで、何をしました！？」

「急展開で、いろいろあったの！！」

「克哉さま返して自首をなさいませ！」

「あたしを、何だと思ってるのよ！？」

「逃がしません。追っ手が既に動いてます。」

「ヤッホ～、千恵さん、自首って、何なん？」

「克哉さま??」

・・・それって、どういうことですか？」

「それは、・・・話せば長くなるけど、・・・。」

とりあえず、メールで伝えることにした。

どうとられるかわからないけど・・・。

何もかも、メールに託す。

ドアのこと、

お金や、

時空の亀裂の件も・・・。

「これ、ちょっと、・・・

滑稽過ぎて、

執事長、こんなの見たら、ケータイ折ります・・・。」

もっともな千恵の感想。

だとしても、これしか事実を書きようがない。

「ゆかり様、わたしは信じておりますが・・・。」

自首なさい、とか言ってたじゃんよ？

「わたしには力もないし、

ゆかり様逮捕の方針、変わらないでしょう・・・。

気をつけて。

特捜はもう、鹿児島に行ったことまで突き止めています。」

「ありがとう。そのままメール預かって。

目的地まで、とにかく行くから。」

「大丈夫。

星の職員相手なら、ぼくから話して守ってやるよ。」

「・・・ありがとう・・・。」

恐い気持ちが和らいで、克哉の横顔見つめるゆかり。

すぐそこに、追っ手は迫ってきてるかも・・・。

ゆかりは外を不安げに見る。

すれちがう車で男がつぶやいた。

「星 麗香さん？今の車に・・・？」

「麗香さん？見間違いだろ？」

「・・・そうだけど・・・？」

言い合う車に次の指令が。

「ドーベルくん、すぐUターンできないか？

ターゲットより西に行き過ぎ。

・・・ドワーフくん、ノートパソコン準備して
簡易スキャナをダウンロードしろ。」

K・S・K、ゆかりが何も知らぬ間に、
網を絞って迫ってきていた。

「追いついた。前の車の、その前だ。」

やがてゆかりの車の次へ。

「とらえたぞ。

紺のプリウス、呉ナンバー、

300の『あ』の10-40。」

今、何て??

麗香がビクリ！

人知れず、どぎまぎしつつ、聞き耳立てる。

「繰り返す。

紺のプリウス、呉ナンバー、

300の『あ』の10-40。」

< ほんとなの？

・・・紺のプリウス、天使（10、4）の 麗（0）・・・

克哉がどうして、ここに来てるの??

・・・克哉って、ビジターだった？

何てこと・・・。B型でもうサイテーなのに・・・。>

「あの車、さっきの車だ。」

「さっき、って？」

「麗香さん似の人が乗ってた・・・。」

「すぐわかる。勝負どころはこの先だ。

人けが無いから、そこでさらうぞ。」

「えー！？待って！」

麗香が思わず叫んでた。みんなの視線を集めてしまった。

『どうしよう、なんて言おう……。』

と戸惑って、とっさに地図の画像を見上げた。

「変じゃない？向こうがこっちに向かっている？」

「……。言われてみれば……。」

とオペレーター。

「ドーベルくん。そのまま尾行。手は出すな。

向こうがどこに行くのか見るんだ。」

様子見の路線で麗香、ひと安心。

「克哉が乱暴されずに済んだ……。」

もう1つ、
妙な報告あがってた。

麗香によく似た女が乗ってる。

当人は、
「・・・変な偶然。おもしろい・・・。」
ごまかしたけど、心当たりが・・・。

「麗香さん？」

「ごめん・・・1人にしてくれる？」

動揺隠して、図書室奥へ。

<あの女、克哉と仲良くドライブ、か？

・・・私の代わりに結婚したの？

・・・でも、何で、2人でここに来てるわけ？

・・・新婚旅行？・・・そんなはずない。

ハネムーン行くならナスカかエジプトよ・・・。

もしや、私を連れ戻すって？

それはムリ。

今は克哉はうざいだけ。仕事はやめろ、主婦になれ、って。

それよりも、今は化け猫倒すこと。

世界の未来がかかっているから。

・・・問題の、ビジターは、じゃあ、あの女？

ずっと会ってた克哉なわけない。

会いづらい。断ち切ったはずの克哉にも、

身代りにしたあの女にも。

まいったな・・・。私も幹部の1人だし、

2人に説明しないとイケない・・・。>

案の定、

スタジオ戻れば ビジターをどう見分けるか言い合っていた。

やっぱりね・・・。

私が言えばカンタンか。

結婚ドタキャン、言いたくないけど。

速やかに女を連れてくることで、

今後の策はおよそ決まった。

シグナルは、町中を抜け、林道へ。

「やっぱり、ここへ向かってるのか？」

「克哉さん、・・・。」

ゆかりが不安になっている。

「林の中よ。間違っていない？」

「言ってみりゃ、秘密結社の隠れ家さ。

こんな感じは、かえってリアルだ・・・。」

正午ごろ、

階層世界研究所。林の奥地の茶色の工場？

「ここなのね・・・。」

「はいれる場所は、ここだけか・・・。」

扉に1か所、狭い門だけ。

まず克哉、続いてゆかり、門の中。

おそるおそる、でドアに近づく。

「なんか・・・ムリ！やっぱり、帰る！」

と回れ右。

・・・ゆかりの前に　そびえたつ男！

3人のマッチョが門をふさいでた！

たじろぐゆかりを克哉がかばう。

「お客様？

・・・遠慮なさらず、さあ、どうぞ。」

玄関にいた小柄な中年。

後ろから男が3人睨んでる。小男に続き進むしかない。

「この白衣、その上からでも着てください。

いや、なに、軽くユニフォームですよ。」

後ろから男が3人睨んでる。言われた通り着ておくしかない。

足音が響く廊下を 小男と ゆかりと克哉、いかつい3人。

モニターで麗香がゆかりを凝視する。

手早く同じ髪型にした。

「『完璧に確かめる』

って言ったって・・・

気が重いなあ、こんな作戦・・・。」

鏡見て、白衣の襟もと整えて、

作戦の位置に麗香が向かう。

展示室。

「研究成果、見てください。」

不安なゆかり。克哉は乗り気。

難解な文書も多いが

異次元の怪物の絵や異様な図表も。

わずかだけ 克哉と距離ができた頃、

ゆかりの背後に、ドーベル接近・・・！？

一瞬で薬をかがせ 羽交い絞め、

あいたドアからゆかりを連れ出す。

入れ替わり、麗香がゆかりの立ち位置へ。

何食わぬ顔で見ながら歩く。

「知ってます？

一万円は、あっちでは、福沢諭吉。

ありえないでしょ？」

そうだよな。

アイコンタクトが克哉から。

麗香は、キョトン。・・・意味わからない。

「おもしろい！本当ですか！」

小男のフォローに麗香、深く一息。

<気付かない？

ボンクラ克哉！腹立つなぁー！

ほんとにスペアといっしょになれば！？>

「ねえ、おじさん、そろそろこっちの相談も・・・。」

すると、小男、

「それじゃ、こちらへ。」

別室で【ゆかり】と並んで座るなり、

克哉はムスツと頬杖ついた。

「ヘタだなぁ…。ぼくにはわかる。麗香だろ？」

克哉の小声に麗香、戦慄！

「何なんだ！君の選んだこの夢は！？」
麗香は目を閉じ、おし黙ってる。

小男が再びここに入るなり、
克哉は立って彼を睨んだ。

「明らかに、何か小細工しましたね？」
だが、小男は動じていない。

「そうですか・・・。
それじゃ、こちらに来てください。」

招かれたのは、ハイテクスタジオ。

指さした地図の画像に赤い点。
「あれが、通称ビジターシグナル。」

ドーベルが車で林道ひた走る。

後部座席でゆかりが寝てる。

縛られて シートベルトで固定され、

深く眠って起きそうにない。

「ドーベルくん、

もういいですよ。戻りなさい。」

オペレーターが静かに命令。

小男が

「あのシグナルは・・・

わかります？

ゆかりさんから出ているんです。

・・・ヤナデンでこの反応をキャッチして、

あなたのプリウス、つけていました。」

道のりを当てられ、克哉、絶句した。

だけど、ある意味、話が早い。

「ビジターか……。そのビジターが帰るには？」

所員全員、視線をそらした。

「その前に、力を貸してほしいのです。」

所長と思しき男が言った。

「この世には、おかしいことが起こるもの。

あなたも今さら、驚かぬよう……。」

聞かされた、化け猫のこと。何もかも。

「……世界の存亡……？」

克哉は茫然。

入口に、ゆかりとドーベル 立っていた。

ゆかりは半眼。機嫌が悪い。

「おじょうさん、失礼しました。

縛られて、手とか、痛くはなかったですか？」

「・・・こちらさま、よほど疲れていたらしく、
熟睡でよだ r 「だぁー！！しゃべり過ぎ！！」

「そういえば、ビジターさんに会ってから、
おもしろくって、全然寝てない。」

「克哉って、寝る間を惜しんで遊ぶから、
つき合う人がかわいそうだわ。」

「ビジターで、そしてあなたは、救世主・・・。」

所長に言われ、ゆかりは、キョトン。

聞かされた、化け猫のこと。何もかも。

「世界の、存亡・・・？」

ゆかりは茫然。

「この斧で、そいつの首を斬るのです。」

「あたしがやるの??

・・・やだ!!キモ過ぎる!!」

「・・・そうですか・・・。」

みな一斉に、どんよりと。

ちょっと・・・。何なの、この芸風は??

うつむいて、恨めしそうに、ぶつぶつと。

「やらねば滅ぶ！」

と凄むとこでしょ？

恐くない。

でも、これはこれで、気味悪い。

「・・・わかった！やるわよ！とどめだけでしょ？」

「やりますか！」

みな一斉に晴れやかに。

ゆかりはしゃがんで頭抱える。

1人だけ、心の支え。克哉さん……。
……しきりに麗香に言い寄っていた。
あの2人、つもる話もあるのだろう。
向こうのドアから出て行っちゃった。

「ゆかり様、どちらへ行きます？」

「……展示室。

化け猫のこと、知っておかなきゃ……。」

展示室。ゆかりは1人、たそがれる。
大好きな人を取られた気分……。

おい、ゆかり！

そもそも、あたしは、ビジターよ。

考えることが違うでしょうが！

化け猫を倒して ここを救うこと。

それから、うちに生還すること。

「由良岳の、どこで化け猫つかまえる？」

克哉の指摘に麗香がうなづく。

「洞穴を転々としてつかめない。キャッチできても、狩りの時だけ。

洞窟も、つながってるかも知れないし。

洞窟、残らず囲っているわ。

金網の中にいるのは確実よ。でもそれだけで、らちがあかない。

平凡に、山狩りしないと。

問題は・・・秘密結社の人手不足ね。」

「厄介な・・・。

化け猫相手の山狩りじゃ、公募したって笑われるだけ。」

「ひとさまを、巻き込めないわ。

化け猫は、より凶暴になってきてるの。」

「わかるのか？」

「餌食になった動物の死骸を見れば見当つくわ。」

「勇猛な仲間が多けりゃいいけどね。

あの3人のマッチョみたいな・・・。

その他は、見ての通りのオタク系。戦えないし、困っちゃったわ。

・・・いや、待って！

何であなたにこんなこと・・・

B型のくせに、介入しないで！」

「あれ？麗香？」

意固地なさまに呆れ顔。

「ゆかりさんくらい素直だったら・・・。」

！サイレンが！

突如、施設を揺るがした！

麗香も 克哉も ゆかりも戸惑う。

速やかにモニター前に立つ麗香。

・・・みるみる顔が青ざめていく。

展示室。

ゆかりは一人、うろたえる。

「・・・今度は、何が起きているの・・・？」

突然に世界の未来を託された

ゆかりに迫る新たな「何か」・・・？

後編・終わり

あとがきにかえて

*このおはなしは、フィクションです。

ゆかりのGOALへのリンクは、こちら。

[*ゆかりのGOAL前編](#)

[*ゆかりのGOAL中編](#)

[*ゆかりのGOAL最終決戦](#)